

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530910

研究課題名(和文)パニック障害に対する認知行動療法施行後のQOLの変化

研究課題名(英文)Quality of life among patients with panic disorder who have received cognitive behavioral therapy

研究代表者

小川 成(Ogawa, Sei)

名古屋市立大学・医学(系)研究科(研究院)・助教

研究者番号：90571688

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)： 認知行動療法後のQOL変化に関する施行前の予測因子を検証した。方法は、治療前に人格特性とパニック障害の症状を評価し、認知行動療法を施行。治療後にQOLを評価した。治療前の人格特性や症状の各項目が治療後のQOLの各項目をいかに予測しているかについて統計解析を行った。

結果は、精神的なQOLについては治療前の人格特性としての開放性と誠実性が、また症状としてのパニック発作の頻度と身体感覚恐怖が有意な予測因子であった。身体的なQOLについては広場恐怖と身体感覚恐怖が有意な予測因子であった。パニック障害の認知行動療法の適応を検討する際には、これらの項目に注意を払うことが有用であるかもしれない。

研究成果の概要(英文)： We examined the baseline predictors of QoL outcomes of patients with panic disorder(PD) after cognitive behavioral therapy(CBT). Patients with PD with or without agoraphobia who participated in our CBT program were administered the Panic Disorder Severity Scale(PDSS) and the NEO Five Factor Index(NEO-FFI) at start and the 12-item Short-Form Health Survey (SF-12) after CBT. We examined if the baseline variables predicted the CBT outcome as to QoL using multiple regression analysis.

The Mental Component Summary in SF-12 after CBT was predicted by low openness and low conscientiousness in NEO-FFI and low frequency of panic attack and high interoceptive fear in PDSS at baseline. Low agoraphobic fear and high interoceptive fear in PDSS predicted the Physical Component Summary in SF-12 after CBT. It might be useful to pay more attention to scores of NEO-FFI or PDSS of patients with PD before CBT.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学 臨床心理学

キーワード：パニック障害 認知行動療法 QOL 予測因子

## 1. 研究開始当初の背景

パニック障害の年間有病率は2%前後とされており、いわゆる多頻度疾患である。しかも重症の者は深刻な機能障害を伴う場合があるほか、高率にうつ病を併存するとされている。1980年代までパニック障害はいわゆる「神経症」として軽症扱いされてきた。しかし、パニック障害の診断基準が1980年に初めてアメリカ精神医学会の公式の診断体系に取り上げられ、1990年前後に選択的セロトニン再取り込み阻害剤(SSRI)がパニック障害などの不安障害にも有効であることが宣伝されるようになったことから、これらの不安障害が「神経症」という軽症の病態ではないという認識が広がっている。

近年、抗不安剤も抗うつ剤による薬物療法はパニック障害などの不安障害の第1選択としては誤った治療方針である可能性が高いことが指摘されるようになってきた。精神療法、すなわち1960年代に主に恐怖症を対象に開発されてきた行動療法と1970年代に主にうつ病を対象に開発されてきた認知療法が互いに相補うものであることが認識され、1980年代に疾患ごとに有効性を核にされた特定の技法を統合した認知行動療法が開発されたのである。認知行動療法は薬物療法と無作為割り付け比較試験で比較されるようになった結果、次のような驚くべき結果が明らかになりつつある。例えば、パニック障害の急性期治療において抗不安剤も抗うつ剤も認知行動療法も有効率はほぼ等しく65%程度である。ところが薬物療法においては急性期治療の後に薬物を継続しないと、再発率が90%、40%に達する一方、認知行動療法の場合は20%程度である。中長期的に見た場合、認知行動療法の優位性は明らかになりつつある。

名古屋市立大学精神・認知・行動医学分野の認知行動療法グループは2001年度以降パニック障害専門外来にて認知行動療法を提

供しており、日本人を対象とした技法ごとの有効性等を始め実践的な知見を蓄積してきた。しかし治療効果の予測因子などについての実践的知見は十分なものではない。中でも重要なアウトカムであるQOLの認知行動療法施行前後での変化に関する研究はほとんどない状況である。

## 2. 研究の目的

本研究では、日本人における認知行動療法の効果、特にQOLの予測因子について検討していく。

まず、パニック障害の症状に関する認知行動療法施行後のQOLの予測因子について検討する。次に人格特性に関する認知行動療法施行後のQOLの予測因子についても検討していく。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究デザイン

コホート研究(追跡研究)

### (2) 実施手順の概要

DSM-IVのパニック障害と診断され、認知行動療法に適応があると臨床診断され認知行動療法を受けたすべての患者が対象。目標症例数は100例とした。名古屋市立大学病院こころの医療センター外来や関連病院、関連クリニックに協力を仰ぎ、認知行動療法に適応のあるパニック障害患者を多数紹介していただいた。

### 介入前評価

DSM-IVのパニック障害と診断され、認知行動療法を希望する患者について、診断を確定し併存疾患を確認するために、Structured Clinical Interview for DSM-IVという半構造化面接を施行して認知行動療法への適応を評価した。その上で認知行動療法の内容及びスケジュールについて説明し、最終的に参加するか否かを患者様自身に判断してもらった。

認知行動療法の適応であると判断された

場合は、ベースライン評価としては、パニック障害に特異的な尺度として(i) Panic Disorder Severity Scale(PDSS)を施行し、重症度を評価した。また人格特性を評価するため(ii) NEO Five-Factor Index(NEO-FFI)を施行した。

#### 介入

ベースラインの評価の終了後、3人ずつのグループによる認知行動療法を施行した。施行したプログラムは、オーストラリアの New South Wales 大学の不安抑うつ研究所の治療プログラムを参考にしている。

プログラムは以下の5項目からなる。毎週1回約2時間×10～12回となっている。

- ・パニック障害に対する心理教育
- ・呼吸コントロール
- ・不安を惹起する認知を是正するための認知再構成
- ・段階的の実体験曝露
- ・身体感覚曝露

また、施行者によるグループミーティングにより介入の同質性を図った。

#### 介入後評価

治療終了後は QOL を評価するため The 12-item Short-Form Health Survey(SF-12)を施行した。

#### 介入後評価・解析

さらに同意が得られた場合には、3ヶ月後および12ヶ月後に近況についての簡単なアンケートのほかに、SF-12を施行した。これらはすべて患者宛郵送して記入してもらい、当方で用意し同封した封筒にて郵送返却していただいた。

平成23年度及び24年度は上記に従いデータの収集を行った。平成25年度はデータ収集を継続するとともに収集されたデータの解析を施行した。

### 4. 研究成果

#### (1) 結果

認知行動療法終了後において、精神的な

QOL については、治療前的人格特性としての開放性と誠実性のスコアが、症状としては治療前のパニック発作の頻度と身体感覚恐怖のスコアが有意な予測因子であった。身体的な QOL については、広場恐怖と身体感覚恐怖のスコアが有意な予測因子であった。

また、治療終了後12ヶ月において、身体的な QOL に関しては、広場恐怖と身体感覚恐怖のスコアが有意な予測因子であった。

#### (2) 考察

本研究では、パニック障害患者に対する認知行動療法施行後の QOL 変化に関し、施行前の予測因子について検証した。その結果、複数の予測因子が検出されたが、短期的にも長期的にも身体的な QOL に関しては、広場恐怖と身体感覚恐怖のスコアが有意な予測因子であることがわかった。パニック障害の治療において認知行動療法の適応を検討する際に、広場恐怖と身体感覚恐怖の症状等に注意を払うことが有用であるかもしれない。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

Funayama T, Furukawa TA, Nakano Y, Noda Y, Ogawa S, Watanabe N, Chen J, Noguchi Y. In-situation safety behaviors among patients with panic disorder: descriptive and correlational study. *Psychiatry Clin Neurosci.*, 67(5), 332-9 (2013) 査読あり

Furukawa TA, Nakano Y, Funayama T, Ogawa S, Ietsugu T, Noda Y, Chen J, Watanabe N, Akechi T. Cognitive-behavioral therapy modifies the naturalistic course of social anxiety disorder: findings from an ABA design study in routine clinical practices. *Psychiatry Clin Neurosci.*, 67(3), 139-47 (2013) 査読あり

Kawaguchi A, Watanabe N, Nakano Y,

Ogawa S, Suzuki M, Kondo M, Furukawa TA, Akechi T. Group cognitive behavioral therapy for patients with generalized social anxiety disorder in Japan: outcomes at 1-year follow up and outcome predictors. Neuropsychiatr Dis Treat, 9, 267-75 (2013) 査読あり

小川成 社交不安障害の認知行動療法最新精神医学 18 巻 2 号 107 - 114 (2013) 査読なし

[学会発表](計6件)

Ogawa S, Watanabe N, Kondo M, Kawaguchi A, Nakagawa R, Okazaki J, Akechi T, Furukawa TA. Quality of life and social functioning in patients with panic disorder who have received cognitive behavioral therapy. Association for Behavioral and Cognitive Therapies 47<sup>th</sup> Annual Convention, Nashville USA, November 21-24, 2013

Ogawa S, Nakano Y, Watanabe N, Kondo M, Kawaguchi A, Akechi T, Furukawa TA. Quality of life and avoidance in patients with panic disorder with agoraphobia who have received cognitive behavioral therapy. Association for Behavioral and Cognitive Therapies 46<sup>th</sup> Annual Convention, National Harbor MD USA, November 15-18, 2012

Ogawa S, Nakano Y, Watanabe N, Kondo M, Sugiura A, Furukawa TA. Quality of life and avoidance in patients with panic disorder with agoraphobia. Association for Behavioral and Cognitive Therapies 45<sup>th</sup> Annual Convention, Toronto Canada, November 10-13, 2011

小川成 近藤真前 川口彰子 今井理紗 岡崎純弥 明智龍男 古川壽亮 認知行動療法によるパニック障害の症状変化が社会機能や QOL に及ぼす影響 日本認知療法学会 東京 2013.8.23-24

小川成 渡辺範雄 近藤真前 川口彰子 明智龍男 古川壽亮 認知行動療法施行後の広場恐怖を伴うパニック障害患者の回避が QOL に及ぼす影響 日本認知療法学会 東京 2012.11.23-24

小川成 中野有美 近藤真前 川口彰子 渡辺範雄 明智龍男 古川壽亮 広場恐怖を伴うパニック障害患者の回避行動が QOL に及ぼす影響 日本認知療法学会 大阪 2011.9.30-10.1

[産業財産権]  
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小川 成 (OGAWA, Sei)  
名古屋市立大学・大学院医学研究科・助教  
研究者番号: 90571688

### (2) 研究分担者

中野 有美 (NAKANO, Yumi)  
椋山女学園大学・人間関係学部・准教授  
研究者番号: 60423860